

事例 2：保育士・保育教諭一人ひとりが貧困を理解するための取り組み

<p>1. 活用方法</p>	<p>研修で活用。</p> <p>① <u>県保育士会に加盟するすべての保育所・認定こども園に対し、貧困パンフレットについて、保育者の気づきや考察を話し合う園内研修の実施を依頼。</u></p> <p>② <u>各園で話し合った結果を、県内の各ブロックで話し合う。</u></p> <p>③ <u>県内ブロック保育士会の代表が集まる研修の際に、各ブロックの代表から報告し、県全体で共有。</u></p>
<p>2. 活用したことによる変化</p>	<p>【個人の変化】</p> <p>とくに多いとされる相対的貧困の子どもについての知識が、保育士自身になく、どちらかと言えば、保護者の問題として捉える場合もあったが、このパンフレットを読むことで、<u>貧困が要因であると気づき、保護者に寄り添い、園が代わりに洗濯をしたり、目に見える形での支援を届けるようになった。</u></p> <p>【組織としての変化】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ <u>パンフレットを配布したことで、各園の保育士・保育教諭一人ひとりにも、子どもの貧困についての理解が広まった。</u> ○ <u>これを機会に県内の各ブロック保育士会で、研修が組まれるようになった。</u> ○ <u>こども食堂の周知や、要保護児童対策地域協議会等との連携も広がった。</u>
<p>3. 活用した感想</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ <u>パンフレットを読んだり、インターネットでの情報収集を行ったりし、日本国内でこんなにも貧困に喘ぐ子どもたちがいるのかと思うと、胸が詰まる。</u> ○ <u>保育士が「虐待かも」と思っていた家庭が、実は相対的貧困だった可能性もあると思った。もしかしたら保護者は、追い詰められていても「助けて」の声が上げられなかったのかもしれない、声を上げられない雰囲気があったのかもしれないと思うと、子育て支援の方法を考えるべきだと思った。</u> ○ <u>保育のプロとして、「助けて」と子どもが声を上げられる環境づくりや、居場所づくりが必要だと思う。</u> ○ <u>「地域共生社会」づくりが求められるなか、子どもと直接かかわる保育所から発信していくことが大事なのではと思った。</u>